

今上陛下踐祚六十年に際し延元元年を想ふ

難波江 通 泰

## はじめに

大正十五年十二月二十五日、大正天皇崩御遊ばされるや、今上陛下には直ちに踐祚遊ばされて元号を「昭和」と改められ、第二百二十四代の皇位を踐ませ給うた。

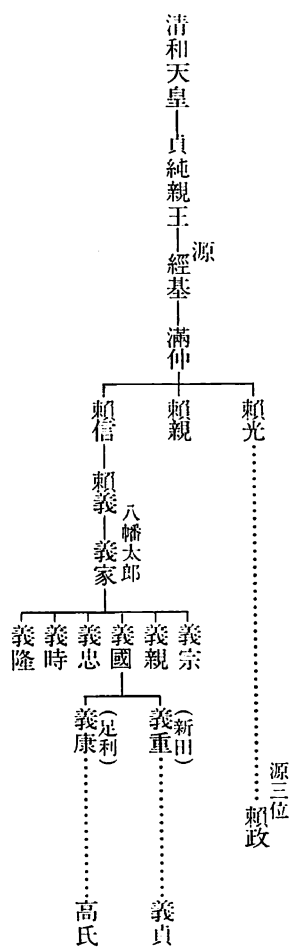
従つて、今年は、今上陛下踐祚より六十年に当る年ではあるが、また、延元元年よりは六百五十年に当る年でもある。延元元年は五月二十五日大楠公湊川で戦死、十二月には後醍醐天皇吉野に遷幸遊ばされて吉野時代（南朝・北朝と称するのは誤り。吉野時代と称するのが正しい。）を迎へることになるのであるが、歴史は吉野時代五十六年の後、応仁、文明の乱など足利下尅上の時代を経て戦国争乱の時代へと突入する。

すなはち、今年は、今上陛下踐祚六十年の奉祝の年ではあるが、吉野時代の始まった延元元年よりは六百五十年に当る年なのでもある。われわれは深く厳しく国史を回顧し、以て、今日に如何に処すべきかを痛切に考へ、これを明確にせねばならないであらう。

## 足利氏の家系

足利氏は新田氏と同族で賜姓源氏である（系図<sup>（一）</sup>参照）。清和天皇の第六皇子貞純親王の長子六孫王経基が源姓を賜はり清和源氏の祖となった。その長男が源満仲。そして、この満仲の長男が、前九年、後三年の役などで名高い摂津源氏の祖の源頼光で、その子孫に鶴退治や宇治の平等院の扇の芝で有名な源三位頼政がある。次男は大和源氏の祖の頼親。三男は河内源氏の祖の頼信で、その子孫に八幡太郎義家、鎮西八郎為朝、牛若丸（源義経）、征夷大將軍源頼朝、そ

〔系圖一〕

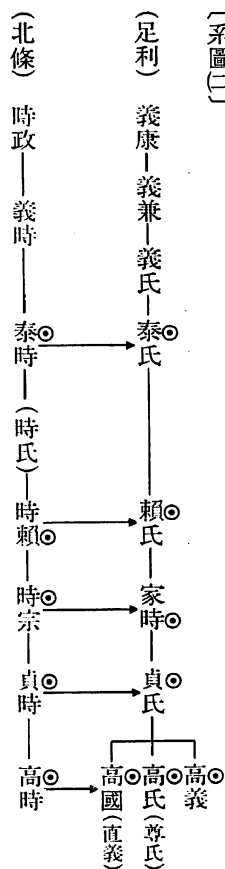


して三代將軍右大臣源実朝などが出てゐる。

その中の義家に男子数名あり、第三男が源義國。その長男を義重といひ、新田氏の祖で、新田義貞はその子孫である。次男の義康は足利氏の祖で、その子孫に足利高氏がある。

この義康の子孫（系圖二）、義兼、義氏、泰氏、頼氏、家時、貞氏と続き、貞氏の子供、長男の高義は早世。次男が高氏、その弟が高國で、後に直義と改名した。

〔系圖二〕



これと並行に執権北條氏の系図を記すと（系図）、時政、義時、泰時、時氏（これは早世）、最明寺入道時頼、相模太郎時宗、貞時、そして最後が執権北條高時である。

烏帽子親あはしおや、烏帽子子あはしこ（兒）、烏帽子名あはしな

今日では、子供の名前は、父や祖父が命名し、一生その名を使用するものであり、文字の吉凶を選び、祖先の名の一字を用ひるなどして、その子の将来を祝福するのが普通で、それ以外に、格別な觀念を伴つてはゐないであらう。

しかし古昔に於いては、重要な価値、重大なる觀念を有して居り、生みの親のみが親ではなく、今日でも名附けの親といふが、武士の間ではこれを烏帽子親あはしおやといひ、元服に際して幼名を廃し、成人としての命名を行った。その時、

烏帽子を冠せる人が自分の名前の一字を与へるのが慣習であつて、名を与へた人を烏帽子親あはしおや、与へられた子供を烏帽子子あはしこ（兒）といひ、与へられた名を烏帽子名あはしなと言つて、この二人の間には親子としての厳格、嚴重なる倫理、道德が成立したのであつた。文覚上人（遠藤武者盛遠）は十三歳で元服したが、そのことを『源平盛衰記』<sup>十</sup>は

遠藤左近將監盛光が一男……十三に成りける年、一門に遠藤三郎滝口遠光と云ふ者、呼び寄せて元服せさせて、烏帽子子とす。父盛光が盛◎を取り、烏帽子親、遠光が遠◎を取りて、盛遠◎◎と名を付け……遠藤武者盛遠とぞ云ひける。

と記し、義経が鶴越の嶮を踏破の際、道案内をした十八歳の男子（熊王）に命名する時のことを『平家物語』<sup>九</sup>は熊王とて生年十八歳に成りける小冠者を奉る。御曹司、纏もといて髻取り上げさせ給て、父をば鷲尾庄司武久と云ふ

間、是をば鷺尾三郎義久（義は義経の義、久は父武久の久）と名乗らせて、一の谷の先打せさせ、案内者にこそ具せられけれ。

と記してゐる。但し、『源平盛衰記』<sup>六十</sup>では

汝を鷺尾三郎と云ふべし。名乗りは我が片名（二字の名のうち一字を片名といふ）に父が片名を取りて、経春（経は義経の経）と付くべし。

と経春になつてゐるが、内容に関しては同一の事である。

また、北條時宗の「宗」字に關して『類聚名物考』は

將軍家の御名の一字を賜ふ事は、鎌倉の將軍宗尊親王の、北條時宗に、宗字を賜ひしを始めとする歟。

と記し、足利貞氏、高氏の父子に關しては『異本伯耆卷』に

足利讃岐守は、相模守貞時が烏帽子子にて、貞氏と号し、其の子高氏は……（北條）高時の称号の一字をうけ

て、高氏とぞ云ける。

と記してゐる。

徳川家康は幼名竹千代。弘治二年正月十五日、十五歳にして元服したが、その際、今川義元が烏帽子親となつて加冠し、義元の妹婿の関口刑部少輔親永（<sup>一本、義</sup>）が理髪（童髪を成人髪にととのへる役）をした。そして親永の娘（義元の姪）を竹千代の北の方（正室。後の築山殿）と定め、義元の一文字の元を与へて（烏帽子名）元信と名づけたが、後に元康と改め、更に家康と改めた（康は祖父清康の康であり、清康の幼名竹千代を家康も幼名にしてゐた）。そのことを『松平記』一、『東照宮御実紀』二などに記してゐる（原文省略）。

また、水戸光圀（国）の元服に關しては『桃源遺事』<sup>一</sup>に

（寛永）十三年丙子七月六日、家光公の仰せによつて、西山公（光圀のこと。幼名は千代松丸と稱してゐた）、江戸の御城にて御元服、御名乗りの字御拝領ありて、徳川左衛門督光国（光は家光の光）と御名乗被<sup>ちせ</sup>成候。此の時御歳九。

と記されてゐる。

以上、引用数例にとどめたが、烏帽子親<sup>◎</sup>といひ、烏帽子子<sup>◎</sup>といひ、それは、その文字の示すが如く、親に仕へる子としての道德で以て結ばれ、更にその殆んどは主従の關係で以ても結ばれてゐたのであった。

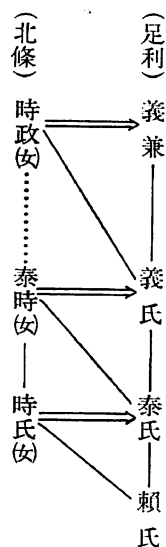
### 足利氏と北条氏との關係

以上のことを踏まへて、足利氏と北条氏とがどの様な關係にあつたかを眺めると、足利氏は系圖に記した如く、頼義から義氏まで「義」の字が続き、義氏から高氏まで、一応、「氏」の字が続いてゐるが、これは祖先の名の一字（片名）を受け継いで來たものであらう。

また、北條は執權、足利はその家臣であつて、両者は代々、主従の關係で結ばれて來てゐるのであるが、さうした主従關係以外に（系圖）、泰<sup>◎</sup>時は泰氏に、時頼<sup>◎</sup>は頼氏に、時宗<sup>◎</sup>は家時に、貞時<sup>◎</sup>は貞氏に（この貞氏と、その次男の高氏の命名に關しては、先に『異本伯耆卷』を引いてこれを記した）、そして高時<sup>◎</sup>は、高義<sup>◎</sup>、高氏<sup>◎</sup>、高国の三兄弟にと、それぞれ、北条氏は先祖代々、その名の一字を足利氏に与へて密接な親子の關係が続いてゐたのであった。

しかも、そののみならず（系圖<sup>白</sup>参照）、時政（北條）の娘は義兼（足利）に嫁いで義氏が生まれ、その義氏には泰時の

〔系圖三〕



娘が嫁いで泰氏が生まれ、更に泰氏には時氏の娘が嫁いで頼氏が生まれてゐるのであって、北條氏と足利氏の関係は、單なる主従の関係のみにとどまらず、親子として、肉親として、百年以上の緊密なる血縁で結ばれて來たのであつて、足利氏は先祖代々、北條氏の格別なる信頼と恩愛を、最も深く、最も厚く受けて來てゐたのであつた。それを裏切り、重代の恩顧を仇で返へしたのが足利高氏であつた。

系圖(二)の高氏の下に(尊氏)と記したが、これは衆知の如く、北條高時から与へられた「高」を、建武中興に際して後醍醐天皇から「尊」の字を賜はつて尊氏と改めたのであつた。しかし、その後、天皇に叛<sup>か</sup>き、逆賊となつてそれは没収された。當時は騒乱甚だしく、そのことは一般には周知徹底されなかつたが、准后として吉野朝廷で最も重きをなした北畠親房が、一貫して「高氏」と記してゐることは、朝廷では「尊」の字を没収し、その使用を認められなかつたことを反映してゐると言ひ得るであらう。事の道理からも当然のことながら、當時の有力な記録に照しても「尊氏」と記すことは誤りであらう。更に言ふならば、彼は「尊」の字を賜はつたとき「高」の字は放棄したのであり、そして更に「尊」の字も没収されたのであるから、彼の名前には発音のみが残り、記すべき文字は喪失してしまつたと言はなければならない。従つて該当する文字がなく、TAKA氏とでも記す

さねばならないが、ここでは北畠准后に従って高氏と記すことにする。

### 建武中興と足利高氏

後醍醐天皇、建武中興のことを挙げられた際、寂阿入道菊池武時はただ勅命をかしこみ、僅か百五十騎を率ゐて、九州探題、大友、少貳、島津など全九州の軍勢を相手に、天下に魁けて敢然と奮起し、大義のさしまねくところ莞爾として一命を死地に投じた。

されば中興の大業成つて論功行賞が行はれた時、功臣第一等たるべき大楠公は

元弘の忠烈は、労功の輩、これ多しといへども、いづれも身命を存する者なり。ひとり勅諭に依りて一命を墜せる者は、武時入道なり。忠厚尤も第一たるか。

と奏上、天皇これを御嘉納遊ばされた。

その大楠公は、全国の賊軍を千早の城ただ一箇所に引き寄せて籠城、孤軍奮闘約六箇月、遂に中興の大業成就に天下を導いた。名和長年は隠岐島より天皇を奉迎、船上山に決戦態勢を布いて幕軍北條勢を邀撃した。また

僅かなる新田などいふ国人に、たやすく、いかでかは亡ぼさるべき。

と輕視されてゐた新田義貞も、一たび勅命を奉戴するや奮然蹶起した。源頼朝の乳母の一人の寒河尼は八田宗綱の娘で、小山政光の妻であつた。八田、小山両氏とも源氏とは深い関係があり、政光の子供の七郎が元服の際には頼朝が烏帽子親になり、朝光と、烏帽子名に「朝」の一字を与へた（『吾妻鏡』治承四年十一月二日）。朝光は結城氏の祖となり、その子孫、鎌倉幕府と関係が深く、北條高時の頃に結城宗広が現れた。宗広は鎌倉に在つて、挙兵の條件とし



ては最も不利な立場にあった。が、一旦、勅命を奉じた宗広は寡兵を以て十万余騎の大軍を敵とし、鎌倉幕府百五十年の本據に対して敢然と義軍を挙げたのであった。

これら全国に蹶起した勤皇義軍の將兵たちは、勅命を奉じては利害打算を放擲し、微力、寡兵を以て、日夜惡戰苦闘を続けてゐた。その最中、同じく勅命を戴きながら、足利高氏は何を考へ、何を企らんでゐたのであったらうか。彼は、最初、後醍醐天皇攻撃の北条軍に加はつて笠置攻略に参加した。ついで、船上山に向ひ、後醍醐天皇攻撃の大將となつて出撃した。のであったが、高氏は戰闘らしい戰闘は一度も行なつてゐなく、己れの出血を避け、犠牲を出すことを拒否してゐた。何が故に高氏はその様な態度をとつたのであったらうか。

### 足利の野心と怨念

孔子は、色彩に於いて、音楽に於いて、また、人物に關して、或は人心を魅惑し、或は奸佞邪智にして眞實弁じ難いものは、やがて世道人心に混亂を生じ、國家を転覆に導き、人倫の破壊に及ぶであらうことを恐れ、その正邪曲直、理非の弁別を明確にせねばならぬことを説いた。論語の陽貨篇に

惡紫之奪朱也。惡鄭聲之亂雅樂也。惡利口之覆邦家者。

と言ひ、鄉黨篇に

紅紫不以爲褻服。

と言つてゐるのはこれである。揚雄はこれを踏まへて『法言』（吾子）に「蒼蠅紅紫」と言つた。紅と紫は間色で、正色の朱に似てゐることから、ものごとの紛らはしいことに喩へ、奸細なる者が純正なる者に似て弁じ難いことを指

摘し、蒼蠅（あをばへ）は白色と黒色との間色で、明瞭でないことから黒白、善惡の弁じ難いことに喩へ、人を陥れようと陰謀術策をこととする狡猾な小人俗物を指す言葉になった。

足利に属して、その家臣、部将となった者、その殆んどが驕慢、叛逆の徒輩であった中に、細川頼之と今川了俊の二人は文武兼備、終始、足利に尽した人物であったが、その晩年は嫉視忌憚、讒構嫌疑うち続き、落魄不遇の身をかこった。細川頼之はその不遇を詩に託して『海南行』を作り

人生五十愧無功

花木春過夏已中

満室蒼蠅掃難去

起尋禪榻臥清風

と詠じた。頼之は、足利にとっては最も重要な人物の一人であったが、それが端無くも「満室の蒼蠅、掃へども去り難し」と、足利には奸佞邪智、狡猾なる悪臣、逆臣が数限りなく満ち溢れ、正常を期することは不可能であると洩らしたのであった。字数、僅か七字の此の一句に、足利の内実、如何に醜穢不潔なるものであるかがひ知ることが出来るのである。

いま一人の今川了俊、これも晩年不遇でその最期を知ることとは出来ないが、かつては高氏の最も有力なる腹心の部将であった。この了俊が、足利の家に伝はる、先祖の源義家の置文（遺言状）を「我等なども拝見申したり」として、これをその著『難太平記』に記した。

その置文は

我、七代の孫に、吾が身、生れかはって天下を取らしむべし。

といふものであって、「七代目の子孫のとき、俺が生れ代って、必ず天下を取らしてやらう。」日本の国の支配者にし

てやらうといふ遺言状であつた。ところが、その七代目の子孫に當る足利家時は天下を取ることが出来ず、

我が命をつづめて、三代の中もにて天下を取らしめ給へ。

「私の命を縮めて三代の子孫の中で天下を取らして頂きたい。」と八幡宮に願をかけて割腹自殺をした。

今川了後はこれを見せて貰ひ、それを著書に書き残したのであつた。が、それによつて、足利の家には凶悪不吉なる野心、恐るべき怨念の血の流れてゐることを知ることが出来るのであるが、この家時から三代目に當るのが、高氏であつた。高氏にして、もし天下を取ることが出来なければ、足利の棟梁として、家時と同様に割腹して子孫に怨念を伝へねばならないであらう。さなくば、北條氏を倒して天下を取らねばならない。高氏はこの二者択一に迫られてゐた。その時、正中の変が起り、続いて元弘の変が起つた。天下の形勢、未だ判然とはしないが、野心成就の機運が醸かし出されて来つたと秘かに感じとつたに違ひあるまい。もはや高氏には、北條への殉節もなければ、勤皇の義軍拳兵もあらう筈はない。存するものは天下掌握の野心であり、考へるところはその為の手段、工作のみであつたであらう。されば、高氏は、北條方の攻撃軍に参加したものの、終始、拱手傍觀、ただ天下の成り行きを眺めてゐただけであつた。

やがて、北條氏の命運危殆に瀕し、もはや風前の燈火ともなるを見てとつた高氏は、これを裏切り、寝返つて、始めて勤皇の義軍に加はつた。加はつたとは言ふものの、戦闘に関しては極めて消極的で、兵力の出血消耗を避けて、ただひたすらこれを温存し、北條氏滅亡後の足利政權の樹立に備へてゐた。北條氏滅亡の際、六波羅探題（北方）の北條仲時、京都での戦敗れ、伊吹山麓、近江国の番場で自害したが、その時、これに殉じた将卒は四百三十二人。執權の北條高時は鎌倉東勝寺で自決したが、これに殉じた者八百七十余人、同時に鎌倉の各地に於いて自害して殉じた郎

等、家臣は六千余人の多数にのぼった。いづれも北條氏に殉じたのであった。しかるに高氏は、累代非常なる恩寵を蒙ったにもかかはらず、その滅亡を望み、これを裏切つて弓を引いたのであった。のみならず、大楠公、新田義貞、名和長年らが悪戦苦闘の最中、すでに、全国の有力なる諸大名に書状を發して利を以てこれを誘ひ、天下掌握の工作を着々とめぐらしてゐたのであった。すなわち、建武中興成れるの日に、すでに高氏は足利政權樹立の根を広く深く全国におろしてゐたのであった。

### 悪逆無道二百三十年

高氏が發した書状は、ただ、利を以て人を誘ふところの、実行不可能なる空文に過ぎず、政權掌握の爲の欺瞞行為でしかなかった。

しかるに『太平記』記すところの

古より今に至るまで、人の望む所は名と利の二つ也。

を挙げ、また

武家四海の權を執る世の中に、又、成れかしと思ふ人のみ多かりけり。

を挙げて、建武中興の失敗の一に、論功行賞の不公平を掲げるものが多いが、しかし、論功行賞以前に、すでに高氏は、利欲、權勢、名利、名聞で以て多数の武士を誘惑し、火に油を注ぐが如くにして中興の業を混乱せしめ、これを破綻に導いてゐたのであった。のみならず、彼は事もあらうに

君と君との御争ひになして合戦を致さばや。

と考へて、皇室の内訌、対立を実行に移し、背信、欺瞞、陰謀、術策の限りを尽した。その為に護良親王先づ犠牲となられ、大楠公は湊川で戦死、ついで高氏は持明院統を擁立して自ら征夷大將軍を僭稱し、後醍醐天皇は吉野に遷幸遊ばされるのである。

更に、足利に流れる恐るべき野心、怨念の血は、高氏の孫、義満をして「日本国王源道義」と称せしめた。求めるところは「日本国王」以外の何ものでもなかったのである。しかもそれは、外国（明）に屈従、叩頭、拝跪してであった（『明太宗実録』永樂四年正月己酉の条、永樂六年十二月庚寅の条など参照）。

百鬼夜行。利欲、怨念の血は類を呼んで集まり、留まるところを知らなかった。高氏は我が子、我が弟と戦ひ、高氏の為には貢献頗る大であつた高師直、師泰の兄弟——この兄弟は大楠公戦死の後、官軍を苦しめた強敵であつて、師直は石津で北畠顯家を破り、小楠公を四條畷に破り、吉野を陥れて行宮に火を放ち、師泰は金崎城を攻略、尊良親王、新田義顯はその為に亡くなられるのであつて、この兄弟、惡逆無道、暴慢野卑、品性下劣なる者ではあつたが、高氏にとっては功勞最も大であり、官軍にとっては最も憎惡すべき賊將であつた。それが——高氏、直義の兄弟争ひの巻添へとなり、師直、師泰、その子の師世の父子兄弟三名、共に、世にも無慙なる殺戮をうけるのである。又、大塔宮護良親王は高氏の弟直義の為に弑逆せられ、尊良親王は御自害、恒良親王、成良親王は毒害せられた。そして、その直義を毒殺したのが兄の高氏であつた。

高氏は、北條高時を裏切り、後醍醐天皇に反逆して天皇を苦しめ奉り、天皇の諸皇子を弑逆、大楠公など多くの忠臣は彼の為に命を落していった。しかも高氏は我が子直冬と戦ひ、腹心の部下であつた高師直、師泰、その子の師世の父子兄弟を殺害し、弟の直義を毒殺するのである。世に、高氏を賞讃する声が存するが、この惡逆無道、賞讃すべ

きは一点だに存せずと言はなければならないであらう。

この吉野時代を経て義満の時代に入ると、明徳の乱、応永の乱が起り、続いて永享の乱、嘉吉の乱と、戦乱暴動は相ひ継いで応仁の乱、文明の乱となり、明応の乱を経て戦国争乱の時代に突入するのである。

高氏より義昭までの足利十五代。その二百三十年は、親子兄弟血で血を洗ひ、権勢、権力の座をめぐって主従相ひ争ふ、下剋上、内乱暴動のうち続く醜悪なる時代であった。その間、足利はそれを外に見、己の享楽逸楽のみを事として、国を思はず世を思はず、重税を課しては花の御所を営み、金閣を造り、異国明には土下坐して金銭を乞うて銀閣を建て、ただ遊樂にのみ耽つたのであった。

その最後の第十五代足利義昭は、衰微した足利の挽回を図って織田信長に頼り、信長を父と仰いで尊敬したが、愚俗なる義昭は、信長の勢威、日に盛んなるを妬み、猜疑の果は東の方上杉、武田と結び、西の方は毛利と結んで信長の挟撃を企てるに至った。怒った信長は義昭を追放、天正元年七月、足利は亡び去った。この足利十五代、二百三十八年、それはただ私利私欲を貪り、道義、人倫を破壊して我が国の歴史を傷つけた汚濁の時代でしかなかった。

### 七生滅賊

大楠公、湊川で最期するとき、弟楠木正季の

七生まで、只、同じ人間に生まれて朝敵を滅ぼさばやとこそ存じ候へ。

の言葉に対して

我れもかやうに思ふなり。いざさらば同じく生を替えて、此の本懷を達せん。

と答へ、互ひに刺し違へて亡くなった。七度同じ人間に生まれ替はって朝敵を滅ぼさずにはおかぬ。天皇陛下をお護り申し上げるのだ。といふ最後の言葉に對して、足利に伝はる置文は

七代の孫に、吾が身、生まれかはって、天下を取らしむべし。

といふものであつて、内容、全く逆である。大楠公の方は陛下を護り、國體護持に一家一族滅亡した。足利の方は私利私欲、權勢欲の為に、我が國を無慙なる相にかき乱して滅び去つていった。

明治八年四月四日、明治天皇は水戸徳川邸に行幸遊ばされ、御製を詠ませ給うた。

花ぐはし 桜もあれど このやどの

代代のころを われはとひけり

花見に來たのではない。水戸光圀以來、代々の忠節に感謝の氣持をもつて來たのである。と仰せられた。そして明治三十三年、天皇は光圀に、人臣として最高の位である正一位を贈らせ給ふた。その勅書に

洵ニ是レ勤王ノ倡首ニシテ、実ニ復古ノ指南タリ。

と、明治維新の指導者はこの人（水戸光圀）であると記されたのである。何故であるか。

元禄五年八月、光圀は大楠公の墓碑「嗚呼忠臣楠子之墓」を建てた。それよりして大楠公を尊び仰ぐ氣風が盛んになり、幕末に至つて勤皇の志士は七生滅賊を誓ひ、一命を賭して王事に尽し明治維新を成就したのであった。「今楠公」と呼ばれた真木和泉守は『楠子論』を著して

されば三百年の末になりて、湊川戦死の跡に、水戸黄門光圀卿、嗚呼忠臣の碑を建てられしが、天下の人、かりそめにも義理をわかし知るもの、墓前に拝伏して其の高義を感じ、涙をそそがぬものなし。

と明白にその事を記した。また、和泉守は嘉永年間より文久年間にかけて毎年五月二十五日には楠公祭を斎行し、病中、血を吐きながらもこれを怠らなかつた。水戸光圀が「嗚呼忠臣楠子」<sup>◎</sup>といひ、真木和泉守が「楠子論」<sup>◎</sup>と記し、楠氏とは記さなかつた。大楠公に対して最高の敬意が払はれてゐるのである。

嘉永四年三月十八日、兵学研究の為に藩主に従つて東行の途次、始めて楠公の墓を拝した二十二歳の青年吉田松陰は、感激を覃めて『楠公墓下作』を賦し

為道為義豈計名 誓与斯賊不共生

嗚呼忠臣楠子墓……（中略）……

独跪碑前三嘆息 滿腔義膽空輸困

と、大楠公に託して日本人の踐むべき道を述べ、自分の決意を表明し、安政元年十一月『二十一回猛士説』を作り、同年四月には『七生説』を作つた。そして、安政大獄で死刑に処せられる前日の安政六年十月二十六日『留魂録』を作り、最後に和歌四首を詠じたが、その四首の最後は、

七たびも 生きかへりつつ 夷をぞ

攘はんところ 吾忘れめ哉

であつて、大楠公の七生滅賊の精神は吉田松陰に継承され、明治維新を導いたのであつた。

高山彦九郎は十三歳にして『太平記』を読み、建武の忠臣、志を遂げ得られなかつたことに慨然発憤し、その志を己の志とした。かつて、室鳩巢が、楠公と孔明を対比して度量足らずと言つたことに對し、憤然として、

腐儒、何ぞ事を論するの迂なるや。……天皇、塵を蒙りたまふと聞き、奮然、袖を投じて立つ。安んぞ彼の諸



葛輩の爲すに効ふことを得んや。書を読む此の如くなれば、百万巻と雖も何の益かあらん。

と鳩巢の書を堂下に放擲した。高山彦九郎が天下に先だつて義氣を振起したのは、楠公に対する感激より発してゐると言はなければならない。

若林強斎が「望楠軒」を称したのも楠公崇拜の志より出づるところであり、佐久良東雄も

凡そ臣子たるの道は忠孝の二字にあるのみ。何ぞ他に道あらんや。嗚呼、小子輩、身を立て道を行はんと欲せば、唯々、楠公その人を龜鑑となすべし。

といひ、遺言状には

唯々、唯々、楠正成の尊みことの如き忠臣にならうと、一向一心に思慮おもふべし。思ふて修行すべし。

と書き記し、楠公を敬仰してやまなかつた。

幕末維新の志士にして楠公を仰がざるはなく、すべて楠公を理想とし、七生滅賊を己おれの心となして、奮然、維新の大業に馳せ参じ、これに挺身したのであつた。

### 楠公崇拜

明治維新の大業は建武中興の延長であり、その志の継承に外ならず、これを集約すれば源は大楠公の至誠純忠に発すと言はなければならないであらう。幕末の勤皇歌人橘曙覧は、「贈正三位正成公」と題して

一日生ひとひきは 一日ひとひこころを 大皇おほみかの

御みために盡つくす 吾家わがいえの風

と詠み、また、

湊川 御墓<sup>みはか</sup>の文字は 知らぬ子も

膝折<sup>ひざまげ</sup>りふせて 嗚呼<sup>ああ</sup>といふめり

と、大楠公に限りなき尊敬の念を寄せた。

楠公の忠節に対する感激と畏敬は、外国人にもこれを語らせた。「青葉茂れる桜井の里」の駅趾に英文の碑がある。これを記すは慶応元年、英国公使として来日したパークス(Harry Smith Parkes)。その文は次の通りである。

A tribute by a foreigner  
to the loyalty of  
“the faithful retainer”  
Kusunoki Masashige.  
Who parted from his son  
Masatsura  
at this spot, before the battle of the  
Minatogawa, A.D. 1336.  
Harry S. Parkes  
November 1876  
British Minister to Japan.

記すところは「延元元年（一三三六）、湊川に出陣する前に、此の地に於いてその子正行と訣別したり」とあり、「一外国人より捧げたる讃辞」として「一八七六年十一月 駐日英国公使 ハリー・エス・パークス」とその名を書き記して、楠公を尊敬する者であることを示した。

いま一人は米国の学者グリフィス博士 (William Elliot Griffis) である。グリフィスは明治三年十二月に来日、福井藩（福井県）で教鞭をとり、更に南校、開成校（後の東京帝大）に移り、化学科の創設に力をつくし、化学を初めて我が国の学生に講義した人であった。このグリフィス博士の著書に“THE MIKADO'S EMPIRE”『皇国』があり、その中に（原文省略）「私は日本の学生及び友人達に向って、日本の歴史の中で誰が最も偉いかと、屢々、尋ねたことがあったが、誰に聞いても、何時尋ねても、答は常に定まって大楠公であると答へた。日本人が楠公を目標としてゐる気持は、実に一種の宗教である。」と記して居り、パークス、グリフィスの二人は、欧米流に MASASHIGE KUSUNOKI とは書かず、日本の言ひ方で KUSUNOKI MASASHIGE と記してゐるのであるが、大楠公が、幕末維新より明治にかけて、どれ程、尊敬崇拜を受けてゐたか、これをうかがひ知ることが出来るであらう。

また、高村光雲は大楠公の銅像を作り、陛下を永遠に守護し奉る楠公の精神を明確に表はさんが為に、有識者はこれを宮城二重橋前に建立した。

このたびの大東亜戦争、戦局<sup>ひ</sup>なる秋、われわれの友人、先輩は「非理法権天」菊水の旗を靡かせて戦場に赴き、回天魚雷に、神風特攻隊に、若き命を護国の鬼と化して逝った。名附けて曰く「千早隊」「金剛隊」「菊水隊」「多<sup>た</sup>聞隊」、すべて大楠公を仰ぎ、大楠公忠死の精神に帰したのであった。

## をはりに

戦前に於いては、国民すべてが大楠公を日本歴史上、最高の忠臣として敬仰、高氏を逆賊の最たるものとしてこれを指弾した。しかるに、戦後は、占領政策、左翼革命思想で以て、わが国の歴史は、過去に於いて過ちを犯した罪惡の歴史であり、民主主義は人類最高の、唯一絶対の原理であるかの如くに鼓吹妄信させられて、正邪の判断も、順逆の別もこれを失ひ、変節、曲学横行して、高氏を浮薄輕率に、しかも、無理にこれを讚美しようとする傾向があるが、それは、戦後四十年、乱臣賊子を賞揚する不純なる乱世、濁世がうち続いてゐるものであると言はなければならぬ。

今上陛下踐祚六十年を迎へるに当り、想ふは六百五十年前、建武、延元の昔である。六百五十年前、後醍醐天皇先頭に立たせられて、諸皇子をも犠牲にせられ、破邪顯正、苦難の道を自ら歩まれて道義の如何に重きかを国民に示し給うた。殉忠死節の忠臣達は、天皇の叡慮に副ひ奉るべく、一切の利害打算を放擲して一身一家を顧みず、身を挺して国難に馳せ参じた。建武、延元、純忠の歴史は、道義の一点に於いて微動だにもせざる、悲しくも麗はしき君臣情誼の結晶であつた。今日、国歩艱難なる秋、建武、延元の忠臣辛苦のあとに深く思ひを致し、國體護持の苦難の道を今日に継承して、皇国の道義を明らかにせねばならないであらう。

(本文は正漢字)